

---

# 竜巻を射殺してみよう

三代渡吉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

竜巻を射殺してみよう

### 【Z-ONE】

Z2136E

### 【作者名】

三代渡吉

### 【あらすじ】

竜巻を射殺するなんて出来るわけがないだろう。そんな常識を覆す御馬鹿が、この地球上には存在した。

「見つけたぞ竜巻！」

少年の目の前には、巨大な竜巻が生まれていた。牛や車や柵といった定番のものが飛ばされている。

竜巻と対峙する少年の手の中には、黒光りするちょっと大袈裟な拳銃のようなものが収められていた。少年は、それを手に持ちながら叫んだ。

「お前に、お前に大事なものを奪われて一年。ついに復讐の時はきた！」

憎しみの感情とともに、少年は拳銃を向けた。本物のようだが、よく出来たレプリカのようにも見えるそれは、少年には扱いづらそうな大きさと重量を持っているようだった。

「あの日……僕はDSPをやっていた。そのとき、お前がやつてきた。お前は僕のDSPを巻き込んで飛ばしやがった！ 飛ばされたそれがどこに落ちてきたかわかるか？」

ワナワナと手を震わせながら、少年は憎しみをさらに高めて、竜巻を思い切り睨みながら、吠えるように怒鳴る。

「僕の家にあつた、買つたばかりのK-1の上だよー。コンチクシヨー！」

バンッバンッバンッ！

乾いた銃声が竜巻に向かつて響いた。撃つ度に衝撃が少年の身体を走り、早速アバラが何本か持つていかれた。

くうつと呻きながらも少年は立ち上がり、また竜巻に向かつて拳銃を向けて、撃ち放つた。

バンッバンッバンッ！

パシッパシッパシッ！

「な、何い？」

少年は驚いて銃を撃つのを控えた。ついでに、自分の腕の骨がそろそろヤバイことにも気づいた。

身体を震わせながら、少年は一体自分の銃弾を誰が受け止めたのかを眺めた。そして、少年は目をパッと見開かせて驚いた。銃弾は、全て牛のひづめによつて止められていたのだ！

「お前何者だ！」

「牛だよ」

「みりやわかる！ つていうかなんで喋つてるんだ！」

「竜巻の中に十年もいると、牛は仙人みたいになれるつてわけさ」「いつか竜巻なんて消えるだろ？ 寝惚けたこといつてんじやねえぞ！ バーベキュー野郎！」

「おー、怖い怖い

ピコピコ。

牛は何かで遊んでいた。牛がビヅメを器用に扱つて何かに触れているのは不気味そのものだつた。

しかし、牛が持つているものによく見てみると、それはDSPだつた。

「あ、お前なんでそんなもん持つてるんだよ」

「それは、お前が落としたからだよ。面白そうだったから、俺が代わりのレプリカを車の部品で即興で作り出して、代わりに上に投げたんだ。

「じゃあ、僕のDSPを壊したのは……お前の作った偽者？」

「君のゲーム機壊した？ そいつはお氣の毒

「テメエエエ！」

バンッバンッバンッ！

少年はぶち切れて銃を竜巻にむかつて乱射した。自分が恨むべきは竜巻ではなく、この牛だつたのだ！

だが、器用な足は、つぎつぎにその尋常とは思えない硬さのビヅ

メで受け止めていく。現代に生きる化け物だコイツは。

「あつ」

と思いまして、自分の胸に飛んできた弾を受け止めようとした彼は、間違つてDSPを盾にしてしまつた。牛が今までの余裕さが嘘みたいた絶叫をあげる。

「このガキ、よくも俺のゲーム機をぶち壊しやがったな！ 弁償しろー！」

「この期に及んでよくもぬけぬけどー！」

「面貸せやー タコ殴りにしてやるぞー！」

挑発にのつた少年は、銃を道端に捨ててから、竜巻の中へと飛び込んでいった。少年は竜巻によつて瞬く間に飛ばされていき、牛をとつ捕まえて取つ組み合いを始めた。

どちらも血を撒き散らしながらしばらく殴り合つていたが、仙術を張ることを忘れていた牛は、竜巻の風で一気に頂点まで飛ばされていった。少年も一緒だ。

一人は、信じられないような金切り声をあげながら、地上へと落下していって、叩きつけられた。牛は長い時を経て、ついに人の肉が混ざつたミンチになつたのである。

「つていう昔話があるんだ。だからDSPはまた今度な

「お父さん。嘘はいいから私にDSPとK.ュ.ュ.買って

「お願いだからさ……頼むからさ……スイーツで勘弁してよー。」

娘はニシコリと微笑んだ。

「浮氣するお父さんが悪いのよ

その2

「あれが竜巻か。よーし、撃てーーー！」

部下達が、竜巻に向かつて銃を撃つた。竜巻だつて、流石にこれ

だけの銃弾を撃てば、どこにあるだろ？急所に当たつて消えるだろ？

しかし、駄目だった。

「くそつ！ こうなつたら戦車砲を撃て！」

「ドムツドムツ！」と、今度は戦車砲が次々に放たれた。しかし戦車砲は竜巻の風で明後日の方向に飛んでいき、牧場や民家を次々と爆破していった。

隊長は怒りのあまり、戦車の装甲に腕を振り下ろした。あまりにも硬すぎて、手の骨が全部ボキボギッといつてしまつたが、それを皆に隠しながら再び部下に砲撃を命じた。

まるで花火のように引つ切り無しに放たれていく砲弾だったが、いくつかは竜巻の懷に入つて、中で爆発していった。よし、もう少しだと隊長は嬉しそうに装甲板を叩いた。

今度こそ手の骨がバラバラになり、仕方なく看護平のジヒニファーに包帯を巻いてもらつた。

美人看護士の手當てにヘラヘラしていると、突然携帯の着信音が鳴り響いた。彼のお気に入りのD・Z<sup>デーズ</sup>の新曲着メロに合わせてリズムを取りながら、隊長は電話に応答した。

「助けて、あなた！」

「み、美香か、どうした？」

「今竜巻の中にいるの！ 家ごと吹き飛ばされたの！ だから、だから撃たないで！ キヤアアアアツ！」

「何い！ くそお！」

隊長はすぐに撃ち方やめの指示を出したが、手遅れだつた。受話器から妻の悲鳴と、鼓膜が破れるよくなとつもない爆発音が聞こえた。

電話から聞こえてくる音がノイズだけになり、隊長は力が抜けたよに頑垂れた。

「くそお……畜生……」

そして、もう碎けようのないほどに骨が碎けた手を何度も叩きつ

けてから、涙ながらに言った。

「これ……もう射殺じやねえじやねえかよおー。」

(後書き)

「」はなんライス先生の射殺シリーズ真似事のリベンジ作品。もう意味  
がわからない。誰かの作品に影響を受けて書くのはいいけど、意味  
がわからなくなるものは書いたらいけない。敬意が足りない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2136e/>

---

竜巻を射殺してみよう

2010年10月8日15時16分発行